鹽壺の匙

（しおつぼのさじ）

車谷長吉

新潮社

壺の匙

車谷長吉

新潮社

正月が来ても行く所もなければ、帰る所もなし。訪うて来る人もなければ、訪うて行きたし人もなし。午後、千住の土手を歩く。枯蘆の茫々とすすきまじく、寒き川はぬめく光りて流る。枯蘆の続く様、物凄ぬめ下と黒一節の煙立ち昇りたる中に所有り。近寄りて見れば、男一人、ゴミにうずもれ、石を築き、鉄鍋にて雑煮をにやいたり。濁んだ目なり。吉嘉

新潮

鹽壺の匙

（しおつぼのさじ）

発行――一九九二年一〇月二〇日
二刷――一九九三年二月一〇日
著者――車谷長吉（くるまたにちょうきつ）
発行者――佐藤亮一
発行所――株式会社新潮社
住所――162 東京都新宿区矢来町七一
電話――営業部（03）三二六六―五一一一
編集部（03）三二六六―五四一一
振替――東京四―八〇八
印刷所――錦明印刷株式会社
製本所――株式会社大進堂
© Chouki tsu Kurumatani 1992, Printed in Japan
価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-388401-0 C0093

鹽壺の匙・目次

なんまんだあ絵　7
白桃　23
愚か者　39
死卵
抜髪
桃の木の話
トランジスターのお婆ァ
母の髪を吸うた松の木の物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

萬蔵の場合　51
吃りの父が歌った軍歌　137
鹽壺の匙　227
あとがき　267

装画・題字　著者

見返し　「賢愚経」残巻（伝・大聖武）

鹽壺(しおつぼ)の匙(さじ)

なんまんだあ絵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

おみかはんは今年の正月で数えの七十五になった。二月生れの年強であるから、今様の数え方で言うと七十三ということになるのであるが、明治生れのおみかはんは暮れの餅搗きをしながら、あーあ、これでわしも七十五になるわい、と思ったのである。穫り入れが終って新米で搗いた亥ンの子餅が十一月の末、それは一臼だけであったから隣り近所よしみに配り、残りを家の者みんなで喰うたらすぐになくなってしまった。早うもういっぺん餅を喰いたい、と思っていたので、よっぽど暮れの二十八日に搗こうかと思ったが、それでは正月の餅が堅うなってしまうんで、二十九日の苦日餅は外して三十日に餅搗きをしたのである。

おみかはんがこの家へ嫁に来たのは十七の時だった。それからずっと六十年近く、この家の乾の隅にある薄暗い厨の土間で立ち働いて来た。倅が嫁を貰って姑になり、やがて連れ合いの市太郎が亡くなってからは、「主婦の座」は明け渡したが、相変らず台所仕事にも風呂焚きにも精出して来た。丁度この厨の石土間の上の大屋根に小屋根の梲と天窓が切ってある。昼間はめったに電燈を使わへんので、土間の隅の井戸へ釣瓶を差し込むと、天窓からの光が水面にゆらゆら揺れ

ていた。この井戸のあたりはいつもじめじめしている。それで三年前に水道が引けた時、井戸を埋めてしまおうか、という話が出たが、阿呆、滅相もないこと言うんやない、神棚へ上げるお水はどないしても井戸の水やないとあかん、と言って眦を吊り上げた。それにこの井戸の底に棲んでいる鮒のことも、おみかはんの頭にはあった。井戸の底にはもう何十年になるだろう、大きな鮒が一尾棲んでいた。この鮒はずっと昔、おみかはんがまだ若い時分、この在所一帯が洪水に見舞われ床上浸水になった時に迷い込んで来て棲みついたものだった。その時はみんな田の草舟に乗って逃げたものだった。

この頃、孫娘が大きくなって時折気紛れに台所仕事を手伝って呉れるようになった。しかしどうにも気が気でないことが一つあった。孫は平気でおくどさんの上に庖丁を置くのである。それは何の気なしに置くのであるが、小さい頃からおくどさんの上に刃物を置くと、是非その家に悪いことが起こると聞かされて来たおみかはんには、やっぱし気が気でなかった。刃物がかちゃんッとタイルに当たる音がすると、きッと心臓が刺される思いがした。しかし小言を言うと、お婆ァちゃんは古い古い、と言って小馬鹿にされることが分っていたので、おみかはんは黙っていた。

暮れの餅搗きをしながら、東京へ行って一人暮らしをしとう哲男はこの正月に帰って来るやろか、と考えたが、やっぱし今年もあかんやろ、と思った。帰って来んのは、わしらを捨てる気ィがあるんやないか、と不安になることもあった。しかしもうええ年やさかい、このつぎ帰って来たらこん度こそ是非嫁を持たせる話を決めてしまわんならん、と思っていた。この子はおみかはんにとっては初めての内孫で、ひとしお可愛いと思って来た跡取りの孫であったから、どないしても死ぬまでにこの子の作った曾孫の顔を見たい、と思っていたのである。

おみかはんはこの村へ嫁に来る前、仲人からあんたの嫁入先は村で一、二の大地主やと聞いた。

しかし敗戦直後の農地改革で土地はあらかた失ってしまい、それから二十五年たった今も、その時の農林大臣和田博雄を自分の家から財産を取り上げた鬼だと固く信じていた。桃太郎さんに宝物を取り上げられた鬼の気持が痛いほどよく分った。そんなことを考えていると、宝物を取り上げた桃太郎の方こそ鬼ではないかと思ったりした。しかしそんなことを口に出すと、負け惜しみを言っていると人に嗤われるので、口惜しい気持を顔に出さずにいようと必死だった。ただただ御先祖様に申し訳ない気持でいっぱいだった。さっきも薄暗い棚元の火鉢に掌をかざしてぽつねんとしていると、近所のおたけはんがやって来て、そのことを思い出した。

おたけはんの家は昔、おみかはんの家の小作だった。そんなことは忘れたような顔をしてよくやって来ては、ひとしきり近所の悪口から始まって自分の家の愚痴を言って帰る。おたけはんの方が年は四つ上である。しかしおみかはんも年が七十五になると、村で長年つき合って来た同年輩の者はぽつりぽつり歯が抜けるように亡くなり、馬が合う話し相手を探すとなれば、そうそう贅沢も言っていられなかった。

おたけはんは例によってのっけからその地獄耳ぶりを披露した。やれどこそこの爺が寄る年波に勝てずについに寝込んでしまったとか、やれどこそこの家へ、顔も知らん五十がらみの女が入って行ったけど、あれはさだめし売れ残りの娘が見合いをしたのを仲人が断りに来たんやとか、何でもかんでも知っているのである。五軒も先の家が夜んべ何を喰うたかまで、ちゃんと知っているのである。そうしてべちゃべちゃ喋りながら、時折おたけはんは入歯が歯の根に合わないのか、それを外し、長年百姓をやって来た黒い指で歯糞をほじくってそれを舐めるのだった。手の甲はとっくの昔に皺くちゃだらけになって、斑点がいっぱい浮んでいた。それでやっぱし今日も、話のおしゃげはこの頃お定まりになった自分の家の愚痴を何遍も何遍もひつこく喋って帰った。

と言うのは、正月も七草になった今からすれば去年の秋、おたけはんの家の孫で次男坊の祥造が、聟入先を叩き出されて帰って来た話である。祥造は去年の春先、農繁期を前にして川向うの村へ聟養子に貰われて行ったのである。しかし秋の終りになって農閑期に入るや、姑にいびり出されてしまった。聟入先の嫁に懐妊の兆しが現れるや種馬としての役目は終り、しかもよその家から自分の家へ入って来た男に飯を喰わせるのんが惜しいて惜しいて夜も眠られへんという姑の心根から、その家におられんようになってしまったのだ。しかし子供の出来へんうちは入聟や嫁を籍へ入れへんという昔からこの在所に行なわれている根強いしきたりと、何事もまあ、まあとうやむやのうちにすましてしまおうとする肝煎の圧力で、出るところへ出ても文句一つ言えへんということになってしまい、結局は泣き寝入りしてしまった。おみかはんは、ふんふんと相槌を打ちながら、ほんまにしょうがあらへんがな、ほないじごしゃご言うて見ても、つまりはあんた家は昔、小作人やったさかい、家に格式いうもんがあらへんねん、そやからなめられるんや、と思っていた。仕舞いには話があんまりくどいんで厭気が差し、ふんふん、ふんと応えながらあらぬよそごとを考えていた。

東京へ出ている哲男は八年前、この村で初めて大学へ入った。しかし村では昔から朝起き抜けと同時に野良へ出て働く者が一番エラいということになっていたので、高校の時までは家の仕事も手伝わんと、蝶採集の捕虫網を持って野山を駆け廻っている極楽とんぼで通っていた。ある時、おみかはんは哲男が雪彦山で捕って来た「おおむらさき」という美しい蝶を見せられた。在所で生れ育ったおみかはんには蝶など珍しくもないものだが、哲男が見せて呉れたそれは目を見はるばかり美しい蝶だった。ほら、お婆ん、この蝶な、国蝶に指定されて、七十五円切手にもなっとんや。おみかはんはしかし、その時、哲男の妙にはしゃいだ声を耳にして不安な心地がした。い

つぞや神戸の三ノ宮駅の待合室でふと耳にした恐ろしい話が甦って来たのである。自分と同年輩の女が、倅が蝶採集に夢中になってアマゾン川の密林へ行った切り、行方不明になってしまった、と言っていたのである。たしかに哲男の見せて呉れたその蝶は男を迷わせるだけの美しい光を放っていた。哲男もすでに、わが身ではまだ気がついとうへんけど、蝶の美しさに心を奪われた声を出していた。

おみかはんは、さっきおたけはんが帰ってからもやっぱし棚元の火鉢の前にぽつねんと坐り込んでいた。冬の日は暮れるのが早く、もともと薄暗いこの部屋はもう真ッ暗だった。火鉢の火も冷えて吸い込まれるように薄ら寒く、おみかはんは鉄火箸で灰をほじくりながら、こん度哲男が戻って来るまでには嫁に貰う女の目当てだけはつけとかないかんし、それにどないしてもあれだけはしとかなあかんな、とぼんやり考えていた。さっきおたけはんが、村の南の三軒家の兵吉つァんが、正月来の寒波で腰が冷えて、老いには勝てず、ついに寝込んでしまった、という風な話をしていた。兵吉つァんはおみかはんより二つ上である。赤ら顔の、その特に赤い鼻が想い浮んだ。すると寒そうに手の甲で洟水をすすりながら入って来たおたけはんが、上り框に坐り込むなり衿頸に押し込んでいたモスリンの衿巻きをたくし上げて、洟水を拭いた時の暗い情景も想い出した。しかしおみかはんは、さ、そろそろ晩餉の仕度せんならん、と思い、目を開いて気を取り直すと、よっこらしょっと脛に手を突いて力なく起ち上がった。それから腹の前で両手を組んで、背伸びをするように曲った背筋を伸ばしたが、またするすると曲ってしまった。隙間風が衿頸をぴゅっと吹き抜けた。まあ、あそこへ行くんにしてもぬくなってからのことやな、と思った。

哲男が物心ついた頃、座敷の奥の床の間の上には天皇皇后両陛下の御真影が埃を被って掛かっていた。それは戦前の「主婦之友」の附録だった。当時としては珍しいものだったに違いない彩

色写真も、もうだいぶ色が冷めていた。家の者は誰もその写真に敬意を払っている風はなく、と言って馬鹿にしている風もなく、要するに壁のシミ程度にみんな無関心だった。その御真影の下の床の間の掛軸は、夏は勇み鯉の瀧昇り、冬は京都の六角堂に旅の坊さんをあしらったものだった。いずれもお伊勢参りのお土産とかで、安物らしくどちらを掛けてもあまりぱっとしなかった。

しかしその床の間の隣りの仏壇と、その上に掛かっている御先祖様の肖像画の方はすこぶる大事にし、おみかはんが朝晩、炊き立ての御飯と金盞花など仏様用の花を供えて拝んでいるのを、哲男は小さい頃からいつも見ていた。お婆んは一瞬仏壇の奥をきッと睨むと、なんまんだぶ、なんまんだぶ、と言って前へちぢこまるのだった。その御先祖様の絵というのは、どこの田舎家の座敷にも掛かっている古臭い墨絵であって、かなり暮らし向きの貧しい家でもこれだけは無理をしてみんな掛かっているのである。それは見るだに気味の悪い死人の肖像画だった。大道絵師が蛇や龍の絵を描くような筆づかいで描かれ、どことなく線香臭く、田舎の葬殮の暗い匂いが滲みついていた。生きた人を目の前にしながら、その人の死顔を透かし視ながら描いたのではないかと思われるような絵である。

ゆうべ哲男が夏期休暇を三日取って帰って来ると、母親の信子はんはもう嬉しくて嬉しくて、この家で一番大事な部屋に衾を敷いた。哲男はこの御先祖様の絵が掛かっている部屋で寝るのはあまり気がすすまなかったが、まだこの家で寝起きしていた時分に使っていた部屋は妹が占領していたので、仕方がなかった。信子はんは布団を敷いて蚊帳を吊りながら、あしたは早う起きて魚市場へ行って来んならん、と早速に考えていた。哲男の好きな小蝦を買うて来て、それで出汁を作って素麺食べさしちゃらんならん、あずかっとう見合い写真も見せて、何が何でもこの三日のうちに嫁を持たせる段取りもつけてしまわんならんし、あれこれ考えるとそれだけで心が浮き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com